2014 年度 畠山ゼミ

卒業研究論文 要旨集

2015 / 1 / 31

早稲田大学 人間科学部

目　次

（順不同）

1. 石川 ゆかり　高齢者の美容とその力に関する研究

2. 藤井 美帆　　ファースト・インプレッションの魅せ方

3. 桜井 静　　スマートフォン用アイコンのユニバーサルデザイン性に関する研究

4. 小倉 彩佳　　障害者との共生に向けた教育形態について

5. 金子 直弘　　白内障患者にとっての液晶ディスプレイと紙における文章の読みやすさ

6. 立川 真衣　　現代の情報環境におけるユニバーサルデザインに関する研究

7. 三村 将広　　ラグビー早明戦プロジェクト

8. 山岸 竜也　　独居高齢者の生活と社会とのつながり

9. 山根 さやか 知的障碍児と遊びの関わり

10. 赤野 早菜江 知的障がい者の雇用と就労

11. 岩本 佳子　　聴覚障害者の防災意識に関する調査

高齢者の美容とその力に関する研究

1J11E017-1　　石川　ゆかり　　（指導教員）畠山　卓朗

１．序論

筆者は，大学生活約四年間を通し，本学部基本理念でもある「Well-being(よりよく生きること)の追求」を様々な視点から学んできた.

日本は現在，65 歳以上の高齢者人口が総人口に占める割合の 25.1%という高齢社会が進んでいるのが現状だ.

このような高齢社会が進む日本において,「どのような社会になれば人々がよりよく生きていくことができるのか」筆者は日々考えている. その中でも，美容は生き生きとして生きていくための大きな鍵の１つになるのではないか，と考えた.

それゆえ、高齢者にとっての美容と，美容が心身にどのような力を与えることができるのか,という美容の力について考察した．美容の中でも，主に「化粧」に焦点を当てて研究を進めた.

２．研究の背景

高齢者の美容として現在行われている取り組みについて調査を進めた．そして，高齢者にとっての化粧の効果について論じた.そこで挙がった結果や問題点を整理した.

３．調査

高齢者にとっての化粧の効果の要因を深く探るために，実際に化粧が行われている施設などに足を運んだ.

そして，メイクをしている高齢者と触れ合い,生の表情や声を調査した．また，メイク施術者や高齢者の家族にも話を聞くなどして，高齢者にとっての美容が生き生きとして生きていくための大きな鍵の一つになっているのか調査を行った.

４．考察

３．調査での結果を踏まえ,「高齢者の美容の力」について，施術者・高齢者・高齢者家族という３者の立場を踏まえ考察した.

そして，美容の効果を示す要因として,「化粧をする（綺麗になる)」「触れる」「コミュ二ケーションをとる」という３つの柱から考察を進めた.

５．結論

本研究を通して，筆者は高齢者にとって美容（化粧をすること）はよりよく生きていくための大きな鍵の１つになるのではないか，という仮説をもとに調査を進めてきた．その結果，仮説通り美容は高齢者にとってよりよく生きていく上で大きな鍵の１つになると感じた．この結果を踏まえ，高齢社会が進む日本において，筆者が日々考えている人々がよりよく生きていく社会を作るための１つの手段として高齢者の化粧の重要性をより多くの人に認知してもらい,浸透させていくことが大切だと考えた.そして,１人でも多くの人が生き生きとした人生を全うしてもらうことを願う.

ファースト・インプレッションの魅せ方

１Ｊ１１Ｄ２４１－８　　藤井　美帆　　（指導教員）　畠山　卓朗

１．序論

私たちは様々な人と関わりを持ちながら，色々な場面において，多くの関わりを持ちながら，社会生活を送っている.社会生活の中で私たちは“初対面”の人と関わるという緊迫した経験をしなければいけない.初めて人と対面する際に私たちは警戒を行い，その人がどんな人だろうかと注意深く観察を行う.そして初対面にも関わらず，相手がこんな人であると決めつけてしまうことがある.

本研究において，ファースト・インプレッションにおける悩みや，理想像はどのようなものであるかを，アンケートを通して調査し，性別や年齢，所属によって異なる理想像の比較をした． また，文献を通して，見た目において，どのような要素がファースト・インプレッションにおいて，どのような印象を与えるのかを調べ，それらを元に，アンケート調査によって抽出した悩みに対するアプローチ方法を考えた.

２．研究の背景と重要性

まず，ファースト・インプレッションの定義に関して触れた．本研究では「判断や推理する時間も与えないほど，瞬間的にとらえた初対面の時に受け取る印象のこと」と定めた．そして，ファースト・インプレッションに関して行われている研究について触れるとともに，ファースト・インプレッションの重要性を述べた.

３．ファースト・インプレッションに関する調査

18歳～82歳までの所属が異なる男女163人にアンケート調査を行った．ファースト・インプレッションにおける理想像とファースト・インプレッションにおける悩みに関する質問を行った．また，性別や年齢，所属によって比較を行った．人それぞれファースト・インプレッションにおける理想像は異なったが，最も「魅力的」な自分を魅せたいという人が多いという結果になった．しかし，良いファースト・インプレッションを与えたいと考える人ばかりではなかった．また，自分が思っている自分と他人から見た自分に違いを感じた経験の有無について尋ねたところ86%の人が「経験あり」，14%の人が「経験なし」という結果になった.

４．考察

「ファースト・インプレッションの注意事項」「ファースト・インプレッションと現代社会」「魅せるファースト・インプレッション」という３つの項目に分けて，ファースト・インプレッションとの付き合い方における筆者の考えを述べた.

５．結論

本研究における１章から４章までのまとめを行った．まとめとともに，調査の課題と本研究では触れることの出来なかったファースト・インプレッションの課題について述べた．インタビュー調査も兼ねるべきであること，調査対象者に偏りが発生してしまっており，今研究では調査対象者が20代の学生が多かったことなどの問題があった.

スマートフォン用アイコンの
ユニバーサルデザイン性に関する研究
-多様なユーザーにとっての分かりやすさの検討-

1J10E114-9 櫻井靜　　（指導教員）畠山卓朗

1 .序論

Apple 社が長年採用していたリッチデザイン UI（ユーザ･インタフェース）を 2013 年に iPhone にて一新しフラットデザイン UI へ転向した際に,アイコンの分かりやすさについて疑問を持った.また,障がいの有無に関わらず生活を便利にしてきたスマートフォンの UI について,UD 視点より検討したいと考えた.

2 .研究背景

1985 年にロナルド･メイスが提唱したユニバーサルデザイン（UD）は,「年齢や能力にかかわりなくすべての生活者に対して適合するデザイン」という考え方である.

スマートフォンは多機能携帯電話という意味であり,ここ数年で他の情報機器に比べ急激な普及をしている情報機器端末である.

情報機器画面における UI の中で,現在主流である GUI のデザインコンセプトに,リッチデザインとフラットデザインという 2 つの概念がある.以下の表 1 にその特徴を示す.

表 1

	特徴	メリット	デメリット
リッチデザイン	立体的	直感的操作が可能	制作者の労力がかかりすぎる
フラットデザイン	平面的	データサイズが小さくて済む	操作の手がかりを得にくい
		見た目が華やか	色が使われすぎる

これを踏まえ,筆者の仮説を,「リッチデザインの方がより多様な多くの人にとって分かりやすい」とした.

今回研究対象とした人々の多様な特性は,主に,「高齢」「視覚障がい」「発達障がい」とした.

3 .研究方法と結果

3.1 アイコンの分かりやすさアンケート調査

5 機種全 42 個のアイコンをランダムに配列した紙面にて,自由回答で何のアイコンかを予想し回答するもの.その他,携帯端末についての「分かりにくい,使いにくい点」を自由記述で問う.

上記の特性の人々を含む,11 歳～83 歳の計 103 名から回答を得た.

3.2 アイコンの視認性視線計測実験

3 機種全 27 個のアイコンをダミーのアイコン共に機種別に配列した画面を被験者に見せ,画面により教示したアイコンを目で追って探してもらい, 視線計測を行った.

21 歳～24 歳の男女計 4 名のデータを得た.

3.3 両者の主な結果のまとめ

携帯端末全般に関して,20 代大学生のスマートフォン（特に iPhone）使用率が他世代に比べ著しく高いものの,苦手意識も持つ者も多く,使いにくさや,分かりにくさについての回答率も高かった.一方高齢者は, らくらくフォン（高齢者をターゲットにした携帯端末）からスマートフォンまで個人差が大きいものの,苦手意識はさほど高くなく,ある程度自身の使用端末に満足している可能性が示唆された.

発達障がいのある群では端末使用経験による正解率の上昇はみられなかった.

アイコンデザイン関しては,リッチデザインの方が両手法ともに最も良い結果であったものの,デザイン別よりも,アイコンの種類別の差異,個人差があることが示唆された.

日常使うものや,元々単独で製品としてあった物（電話やカメラなど）や,デザインとして確立している「メール」などが上位であったが,視認性に関しては周囲の他のダミーアイコンとの形状が酷似していた場合に迷い感が生じた.

4 .考察

今後の UI デザインのあり方について,筆者が必要と考える事柄を以下の 3 つの視点から述べる.

4.1 選択の余地と統一した規格

ユーザーが自分の特性や好みに合わせて複数の UI デザインからを選べるよう,標準で提供することが重要である.それと同時に,各端末において,メーカーが違っても最低 1 種類は同じデザインの UI を標準搭載しておくことで,機種変更した際の使いにくさが低減されると考える.

4.2 ユーザーを巻き込んだ開発

開発段階において,広い年齢層や障がい者などの多様なユーザーが参加できるようにすべきである（User-Involved）.

4.3 提供側およびユーザーの意識改革

合理的配慮における情報機器の積極的使用,デザインという言葉の広義の意味,「まだら健常」という概念の普及などが望まれる.

5 .結論

リッチデザインの方がある程度分かりやすい可能性は示唆されたが,他の要素の影響も考えられた.

研究の進め方については, 各種の対象をより絞って明確なものにする必要性があった.今後同様の研究をする場合には留意していただきたい._

障害者との共生に向けた教育形態について

１J11E055-2　小倉 彩佳　　（指導教員）畠山 卓朗

１．　序論

本研究では，障害者とりわけ知的障害者との共生に向けた教育形態について取り上げている．近年において，性別・年齢・国籍・障害を越えた共生の重要性が問われており，共生社会に向けたさまざまな取り組みが行われている．これは教育現場においても例外ではなく，豊かな人間性を育むことを目的とした，障害を持つ児童生徒と障害を持たない児童生徒が交流し学び合う教育現場が増えている．

障害者と健常者が互いをより身近に感じ，障害にとらわれない価値観を築くためには，学生時代から多くの交流の場が必要なのではないかと思う．将来，社会で生きる人々が人間の多様性を受け入れ，知的障害者と共生していくには，学生時代にどのような教育の場で学ぶのが最適かを調査する．

２．　研究の背景

本研究で焦点を当てている知的障害者は，障害者総人口において約７％の割合を占めている．知的障害児者が学校生活を送るにあたり，主に①普通学級②特別支援学級③特別支援学校の３つの選択肢がある．知的障害児者を普通学級に通わせることに不安を抱える保護者が多いため，昨今の少子化にもかかわらず，特別支援学級や特別支援学校の需要は増え続けている．現在の教育現場におけるさまざまなメリットやデメリットに向き合いながら，社会は豊かな学びを通して障害者と共生していく必要がある．

３．　調査方法と結果

大学生20名にアンケートの協力をお願いし，学生時代の知的障害児者との交流機会の数や，知的障害児者への理解度，交流願望などを伺う．

調査の結果，知的障害児者との交流願望を強く持つ大学生は，①~④の傾向が強かった．

①運動会などの学校内の行事や，学校外でのボランティア活動で知的障害児者と交流経験がある．
②知的障害以外のボランティア経験がある．
③通学先に特別支援学級が設置してある．
④休み時間やクラブ活動などで，互いが対話できる距離での親密な交流経験がある．

４．　考察

特別支援学級の設置は，児童生徒同士が直接的に交流する機会があって初めて意味を成す．両者に必要なのは，より近い距離で互いが触れ合えるインクルージョン教育であると感じた．

また全ての保護者たちが障害に対して前向きな考えを持つには，知的障害児者の保護者を地域で支え合う必要がある．そのためには健常な子供たちやその保護者，また地域の人々に対し，知的障害児者における知識や体験を通じて彼らへの共感と理解を深め合えるように働きかけることが重要である．

５．　結論

共生社会において，「違う」ことは当たり前であり，「違う」物や人が日常的に溢れていることを受け入れる社会を目指すには，小さい頃から「違う」存在と近い距離で過ごす必要がある．また児童生徒だけでなく，健常な子供を持つ保護者も，知的障害を持つ子供や保護者と直接的な交流を行うことで両者間の理解を深めることができるだろう．彼らが障害児者である前に，同じ一人の子供であることを再認識しなければならない．

様々な人間が集まり活動をする「学校」という教育現場はこれからの共生社会を形成していくための一つのツールであり，未だノーマライゼーションの理念が浸透しきっていない日本にとって，教育形態の再構築は共生社会の実現への大きな一歩である．

白内障患者にとっての液晶ディスプレイと紙における文章の読みやすさ

1J11E071-7　金子 直弘　　（指導教員）畠山 卓朗

１．はじめに

高齢化が進む現代の日本において，白内障は多くのひとが直面する病であると言える．80 代では全てのひとが少なからず混濁した水晶体を所有していると言われるからだ．[1]そのような背景を抱えていながら，近年はインターネットの普及により，目で情報を得る機会が増えている．高齢者のインターネット利用率が上昇していくことが予想される現在[2]，白内障患者でも情報が得やすくなるような支援が必要であるという考えに至り，本研究テーマを設定した．

２．読みやすさの評価実験

（１） 目的

液晶ディスプレイにおける「文章の読みやすさ」の実態を，文章を読む際の媒体として多くのひとに慣れ親しまれている紙と比較することで，明らかにする．また白内障患者にとって，より読みやすいと感じる液晶ディスプレイでの文章の表示方法を発見するところ迄を，本実験の目的とする．

（２） 実験概要

液晶ディスプレイにおいて文章を反転表示（背景色：黒，文字色：白）すると，読みやすくなるという仮説のもと，以下のような実験を行う．

白内障患者の見え方を再現した状態で「紙」，「通常表示（背景色：白，文字色：黒）の液晶」，「反転表示（背景色：黒，文字色：白）の液晶」を用いて，文章を実際に読んでもらい，対照実験を行う．文章を読み始めてから読み終わるまでの(1)タスク処理時間，実際に読んだ上での被験者への(2)アンケートを分析することで，それぞれの表示方法の「読みやすさ」について評価し，比較することで結論を明らかにする．

３．結果

（１） タスク処理時間

表１　平均タスク処理時間（分；秒）　　（n＝９）

紙	液晶(通常)	液晶(反転)
05:33.6	05:32.2	05:13.9

（２） アンケート

当紙面では，アンケートの具体的な内容については割愛する．「紙」と「通常表示の液晶」，「反転表示の液晶」の「読みやすさ」に関するアンケートを行なったところ，「反転表示の液晶」が読みやすいと回答した者が最も多かった．本研究の論文中では「読みやすさ」の他に，「集中のし易さ」や「疲れやすさ」等についても扱った．

４．まとめ

今回の実験では，「紙」と「通常表示の液晶」の間に「読みやすさ」の差は見られなかった．また液晶ディスプレイ上では文章を反転表示することで読みやすくなることが分かった．しかし異なる実験環境下でも同様な結果が得られるか否かは明らかでない為，まだ研究する必要がある．

通常表示と反転表示を，より簡単に，切り替えられるような機能を備えた端末の必要性について，考える必要があるように思われる．

参考文献

[1] 佐々木洋，『人種，生活環境の異なる 4 地域での白内障疫学研究』，日本白内障学会誌 13，pp13-20，2001 年

[2] 総務省，『平成 26 年版情報通信白書』，http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h26/pdf/n5300000.pdf（2015/01/15 時点）

現代の情報環境におけるユニバーサルデザインに関する研究
～高齢社会における本と携帯電話のあり方～

1J11E146-7　立川 真衣　　**(指導教員)　畠山 卓朗**

１．背景と研究目的

現在の日本は，情報で溢れかえっている．新聞・本・雑誌・テレビ・ラジオ・インターネットなど様々な情報取得の方法がある．急速に進展している高齢化社会の中で，高齢者は新聞などは読むがスマートフォンや携帯電話はあまり使わず，日々めまぐるしく変化する情報社会から取り残されつつあるのではないかと思った．発展し続ける情報技術や社会の中で，全ての人が適切に情報を得るにはどうしたら良いのか，情報のユニバーサルデザインとは何なのか，ということを考えたことが本研究を行うにあたっての動機である．

本研究では，情報取得のツールの中でも特に，本・新聞と，筆者の世代にとってより身近な携帯電話・スマートフォンを取り上げ，現状の良い点と改善点を明らかにし，情報取得におけるバリアフリー・ユニバーサルデザインのあり方について考えていく．

２．調査

【調査 Ⅰ】大学生～30 代の方を対象としたアンケート調査，【調査 Ⅱ】60 代以上の高齢者を対象にしたインタビュー調査と，そのうち数名の方にスマートフォンの実践をしてもらう．【調査Ⅲ】図書館における実地調査による３種類の調査を行う．【調査 Ⅰ】では，若者の情報取得の現状と高齢者に対する意識を，【調査 Ⅱ】では，高齢者の情報取得の現状を知り，現在の問題点と情報取得サービスに求められていることを調査する．【調査Ⅲ】では，筆者が実際に図書館へ足を運び，小さい字が見えづらい人や視覚障害の方のための図書館におけるサービスを明らかにする．

３．結果と考察

【調査 Ⅰ】では，大学生～30 代の若者はインターネット上のニュースを頻繁に見ており，日常的に情報に触れている人が非常に多いことが分かった．また，若者と高齢者では情報取得量に差がある，という意見が多く見られた．【調査 Ⅱ】では，高齢者の方々は，新聞は読んでいるが本はほとんど読まない，という方が多かった．また「ガラケー」を全員が持っていたが，スマートフォンを持っている人は全くいなかった．【調査Ⅲ】では，現在の図書館におけるサービスに対する工夫や問題点を発見することができた．高齢者の方が本を読むきっかけとなるように，これらのサービスをより充実させ，より認知されていくことを願っている．

これらの結果から，今後高齢社会において情報環境のユニバーサルデザインを実現するためには，３つの課題があることが考えられる．第一に「人」との関わり，第二にその人に合わせた適切なハードとソフトの調節，第三に若者の意識という点である．

４．まとめ

本研究では，本や携帯電話を主とした「情報環境のユニバーサルデザイン」について調査を行ってきた．その結果高齢者はまだまだ情報に関して疎く感じられたが，ハード面だけでなくソフト面からも支えることで，高齢者が家族や友人とのコミュニケーションを楽しむことや新たな趣味・生きがいを発見することができると考える．また，いずれは若者も高齢者になるということを理解し，思いやりを持つことや相手のニーズに近づけるように努力することが必要だと思う．高齢者と若者が相互に理解し合うことで，異なる世代の人でも助け合える社会となっていくことを願っている．

ラグビー早明戦プロジェクト

1J11E245-9　三村将広　　指導教員　畠山卓朗

1. 序論

本研究は.ラグビー早明戦の人気と集客について研究したものである.かつてラグビー早明戦といえば５万人の観客が押し寄せる大きな試合であった.

しかし,近年は３万人程度の観客に減少し,ラグビーの人気も減ってきている.同じラグビーであり,早明戦であるのになぜ人気が低迷してきているのかを分析し,今後盛り上げるための展望を考えたい.

2. 背景

ラグビー早明戦は,毎年 12 月の第１日曜日に早稲田大学と明治大学が試合をするものであり,今年で 90 回目の対戦を迎えた伝統の一戦である.人気低迷期でも毎年３万人の観客動員数を誇るラグビー早明戦であるが,平均５万人の観客数の頃と比べると減ってきている.

今までのラグビー早明戦の総観客動員数は約 200 万人にのぼる.1982 年は６万６999 人の観客数を記録しており,国立競技場において歴代３位の観客動員数となっている.これは東京オリンピックの開会式と閉会式に次ぐ第３位であり,試合の観客数においては第１位である.

3. 研究方法・結果

ラグビー早明戦が盛り上がってきた理由を「ライバル関係」・「伝統の一戦」・「下馬評を覆す一戦」という３つの視点から分析した.

次にラグビー早明戦,そしてラグビー自体の人気低迷の理由を,サッカーと比較して考えた.

そして,ラグビー早明戦をもう一度盛り上げるための仮説をし,その実行と結果を記した.

4. 考察

この章では, ラグビー早明戦を盛り上げるための考察を３つの視点から行った.

１つ目は,「ラグビーをまず見に来てもらうには」である.ラグビーに関心がない人に,「楽しそうなイベント」と認識してもらい,ラグビーを見に来てもらうきっかけを作るのである.

２つ目は,「見に来てくれた人に「また来たい」と思ってもらえるように」である.また来てもらうために,勝つことと選手個人を知ってもらうことが大切であると考えた.

３つ目は,「早明戦・早稲田ラグビー部がどうあるべきか」である.早稲田ラグビーとしての誇りを持つと共に,人間としてどうあるべきかを考え,体現することこそが試合に活きてくるのだ.

5. 結論

早稲田ラグビー部であるからには,大学日本一を目指さなければいけない. ラグビー早明戦を盛り上げることも日本一へのアプローチの一つとして大切である.その中で,ただラグビーをして過ごすのではなく,毎日の自分の行動を考え,自分に厳しく生きていきたい.毎日自分で考え,仲間と考え,悩み,挑戦し続けた４年間があってこそ大学日本一を勝ち取ることができると私は考える.

独居高齢者の生活と社会とのつながり

1J11E266-1　　山岸 竜也　　（指導教員） 畠山 卓朗

1. 序論

日本の社会問題とされる「高齢者の一人暮らし」について取り上げていく. 独居高齢者はどのような日常生活をすごし, 社会とのつながりを維持しているのか, ということを明確にし, 新しい社会とのつながりの形を提案することを目的に研究を進めていく

2. 本研究について

日本の高齢化は, 諸外国をはるかに上回るスピードで進んでいる. 内閣府の高齢社会白書(平成26年度版)によると, 来年の平成27(2015)年には3,395万人となり, 同54(2042)年に3,878万人にまで増加するとされている. 3人に1人が高齢者ということになり, 今後もさらに日本の高齢化が進行していくと予測され, これに伴い高齢者の一人暮らしも増加していく傾向にあることを述べた.

その中でも, 社会的孤立状況の独居高齢者について触れ, 本研究では, 社会的孤立状態にない独居高齢者について調査していくことを述べた.

3. 研究調査

独居高齢者が日々, どのような生活を過ごしているのか. 在宅サービスを利用しているのか, 自立した生活をしているのか, また, 生活の上で不便なことはないか等を知ることを目的とし, 東京都足立区周辺に住んでいる, 独居高齢者にインタビュー形式でアンケートをとった. 属性は表をつかい, インタビューのアンケート結果は, 円グラフや個々の意見として, まとめている.

4. 考察

独居高齢者と直接かかわってみて, 高齢者の中でも, 何か役割を与えられている高齢者はすごく健康的に生き生きしていた. 週に一回街の掃除をする, 家に遊びに来る孫に勉強を教える等, なんでも, なにか近くの目標, それを達成する役割のある人が元気なのであることが分かった.

その中で, 語り部としての独居高齢者のあり方を提案し, それが新しい社会とのつながりの形となるのではないかと述べた.

5. おわりに

今回の研究を通して, 実際に訪問することによって, 独居高齢者への印象が, ネガティブなものからポジティブなものに大きく変わった. 寂しく家にいるだけの独居高齢者はほとんどいなかった. このことはテレビなどでは中々取り上げられないことだと思うが, こういった明るい点にも注目してほしいと強く感じた.

少子高齢化は, 大変だ, よくないことだ, 日本の未来は明るくない, などよく言われるが高齢者の働き方などを見直していくことで, そういった事態は免れるのではないかと強く感じた. 高齢者の, 先人の知恵を日本はもっともっと大切にしていくべきなのかもしれない.

独居高齢者が不安なく生きていける, 社会と繋がり続けられるそんな世の中が, 形成されていくことを願う.

知的障碍児と遊びの関わり
～特別支援学校における現状と課題～

１J11E274-9　山根 さやか　　（指導教員）畠山 卓朗

1．序論

人間にとって，遊ぶことはなくてはならないことである．特に，乳幼児期を通して遊びは子供の成長に大きく関わり，発達の諸側面で総合的にはぐくまれてゆく．

その一方，知的障碍，その中でも特に自閉症児は一般的な遊びを楽しむことが難しいといわれている．それは，自閉症の障碍特性として，社会性の理解の障碍，言語・コミュニケーションの質的な障碍，局所的興味関心・こだわりの３点が関係しているともいわれている．

2．研究背景

知的障碍のある児童の特別支援学校における在学数は他の障碍のある児童よりも多い．

現在，特別支援学校では，遊びの指導という科目が設け，子どもの発達を促す重要な活動として考え，小学部では中核的な学習活動として取り組んでいる．

３．研究方法と研究結果

まず，知的障碍児・特別支援学校の取り巻く環境を調査する．

つぎに，実際に特別支援学校では，どのような“遊びの指導”を行っており、それに対して，知的障碍を持つ児童がどのように取り組んでいるのか観察する．

そして、特別支援学校の教員に“遊びの指導”に関するアンケート・インタビューを行う．

特別支援学校では，市販のおもちゃに工夫を加え，音や光，動きで生徒の興味関心をくすぐるような単純なおもちゃが多数存在していた．また，道具を使ったおもちゃだけでなく，手遊びや音楽に合わせてリズムをとるような遊びも多数取り入れられており，おもちゃ遊びには学びだけでなく，リラクゼーションの役割も含まれていることが分かった．

アンケート調査では，遊びの指導をする中で，一緒に遊びながら遊びを教えている教師が多いことがうかがえた．

4．考察

年々，特別支援学校における受け入れ児童数が増えていること．また，その児童の内訳として，軽度な LD や ADHD といった，以前までは，通常学級で学んでいた生徒も増えていることから，多様な生徒に対応する教師の負担も垣間見えた．

しかし，遊びの指導を行うことの効果として，学習へのスムーズな導入，学習への集中力の高まり，コミュニケーションの活発化が挙げられた．

5．結論

遊びの指導は，学びのきっかけにつながるだけでなく，遊びを通して人とのコミュニケーションにもつながっていることが分かった．

更なる遊びの指導の充実を図るためにも，学びの場を学校だけにとどまらず，社会で共有していくことが重要であると筆者は考えた．

知的障がい者の雇用と就労
～特例子会社に焦点をあてて～

1J11E801-9　赤野 早菜江　　（指導教員）畠山 卓朗

1．序論

平成25年４月，法定雇用率が引き上げられ，民間企業ではこれまでの 1.8％から2.0％となった．働くということは，単に収入を得るだけでなく，生活の質（QOL：Quality of Life）に関わることでもある．特に知的障がい者にとっては，リズムのある生活を送ることができたり，人間関係を広げることができたりする点でも，働く意義は大きい．筆者は特例子会社でのアルバイト経験から，企業が障がい者を雇用するうえで，特例子会社はひとつの良い方法であると考えた．

2．研究背景

知的障がい者は一般就労が難しく，多くの人が授産施設・作業所等で福祉的就労をしている．「就労」とは仕事に就くことではあるが，そのなかでも「雇用」という形で働くことは大きな意味をもつ．企業の障がい者雇用のひとつに特例子会社がある．今まで働く機会が得られなかった人が「雇用」という形で働くことができるようになった点で，特例子会社は大きな役割を果たしている．

3.研究内容

特例子会社で働く障がい者にとって，特例子会社のメリット・課題は何かを明らかにすることを目的としている．都内にある特例子会社で働く知的障がい者17名を対象に，アンケート調査を行った．

4．考察

特例子会社のメリットとしてハード面・ソフト面の環境が整っており，働くなかで不安が少ないこと，安定した給料を得られること，いじめやいやがらせなどの心配が少ないことなどが挙げられた．また，特例子会社は障がい者の能力を存分に発揮することができるうえ，障がい者が業務の主役として働くことができるため，やりがいを感じる機会も多くあることが分かった．

特例子会社の中で障がい者が閉じこもって働くのではなく，彼ら自身が外に出て，より多くの人と接することが障がいの理解につながる．また，外部の人から「ありがとう」や「ごくろうさま」などの言葉をかけられることは，働く人々のやりがいにもつながっている．

5．まとめ

特例子会社は知的障がい者の雇用に貢献しており，企業にとっても障がい者にとってもメリットが生まれるものである．特例子会社が発展していくためには，周りからの障がい理解が必要であり，そのためには障がい者自身が外に出て作業を行い，多くの人と接することが大切である．それらを通して，知的障がい者の職業の選択肢が広がることに期待したい．

聴覚障害者の防災意識に関する調査

2J11E006-8　岩本 佳子　　（担当教員）　畠山 卓朗
（教育コーチ）　土井 幸輝

１．研究の目的

近年，情報技術のユニバーサルデザイン化により，音声だけでなく視覚による緊急速報を得られることが可能になった．しかし，大災害が起きると電気や通信が寸断されてしまい，災害時に使える情報伝達手段は防災無線・メガホン・ラジオなど，ほとんどが「音声」である．聴覚障害者にとって生命線である視覚による情報が寸断され，適切な避難行動をする上で支障が出てしまう．また，東日本大震災では停電や交通機関のストップが原因で多くの帰宅難民者が発生したが，自宅だけでなく外出先や旅行先においても災害時における避難行動は常に心がける必要があるといえる．最近は聴覚障害者のための災害マニュアルが作成されているが，そこには外出先や旅行先における避難情報が少ないことが懸念される．

そこで本研究では，聴覚障害者の外出先・旅行先における避難に関する意識を調査することを目的とした．本研究を通じて，聴覚障害者の外出先・旅行先における避難意識を高めることをねらいとした．

２．方法

本調査には，横浜市聴覚障害者協会と横浜市中途失聴・難聴者協会の各会員 101 人（男 34 人、女 65 人，無回答者 2 人，平均年齢 62.6 歳）に協力してもらった．本調査は，自宅及び外出先・旅行先に対する避難場所・避難経路の認知度，非常口・非常口までの避難経路の確認及び表示のわかりやすさ等について調査紙を作成し，調査参加者に回答してもらう形式で実施した．

３．結果

調査参加者 101 人のうち，避難場所について確認すると答えた人は，自宅 71.3%，外出先 25.7%，旅行先 12.9%であった．避難経路について確認すると答えた人は，自宅 70.3%，外出先 21.8%，旅行先 6.9%であった．建物内の案内図について確認すると答えた人は，外出先 26.7%，旅行先 33.7%，各階の非常口について確認すると答えた人は，外出先 22.8%，旅行先 56.4%，非常口までの経路について確認すると答えた人は，外出先 22.8%，旅行先 39.6%であった．また，案内図の表示についてわかりやすいと答えた人は，外出先 22.8%，旅行先 17.8%，非常口の表示についてわかりやすいと答えた人は，外出先 24.5%，旅行先 36.6%,非常口までの経路についてわかりやすいと答えた人は外出先 16.8%，旅行先 17.8%であった．

以上のことから，聴覚障害者は外出先・旅行先における避難場所・避難経路の認知が低いこと，非常口・非常経路・案内図の確認及び表示のわかりにくさがアンケートにより明らかになった．

４．考察

本調査の結果から，聴覚障害者に居住地以外の外出先・旅行先における避難場所及び避難経路についての重要性を理解する必要がある．また，非常口・非常経路・案内図がわかりにくいことが問題になっていることが明らかになった．

５．結論及び今後の展望

本研究では，聴覚障害者の外出先・旅行先における非常時の避難意識に関する調査を行った．その結果，外出先・旅行先に対する防災意識が低いことが明らかになった.今後は，聴覚障害者の災害時の避難意識を啓発することをすすめるとともに，交通機関・公共施設・宿泊施設における避難手段・案内方法について，ユニバーサルデザインの整備を提言していく．